

平成 29 年 5 月 19 日現在

機関番号：11301

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2015～2016

課題番号：15H06016

研究課題名(和文) 『指環』以後のニーベルンゲン伝承におけるハーゲンの変遷

研究課題名(英文) How the character of Hagen von Tronje changes in the Nibelungen-tradition after Wagner's "Ring"

研究代表者

野内 清香 (NOUCHI, Sayaka)

東北大学・文学研究科・助教

研究者番号：70757913

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,100,000円

研究成果の概要(和文)：中世の叙事詩『ニーベルンゲンの歌』とともにニーベルンゲン伝承の双璧をなす楽劇『ニーベルンゲンの指環』において、ヴァーグナーが『歌』の設定をそのまま引き継ぐのではなく、いかにして北欧の古い伝承を素材として独自の神話世界を構成し、「ニーベルンゲンの息子」ハーゲンを造形したのかを検証した。また、『指環』以後の伝承の変化について、網羅的に作品を収集したり、伝承の舞台となった地での受容を調査することで、現代の伝承における様々なハーゲン像を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：The most important Works in the Nibelungentradition are "the Nibelungenlied" and Richard Wagner's "der Ring des Nibelungen". It was researched how Wagner created his mythic operatic world from not the Nibelungenlied directly but old materials, and how he shaped Hagen as "the son of Nibelungs". Also the Tradition after "the ring" was researched and figures of Hagen in actual Nibelungen-works were made clear by collecting and sorting works and visiting the scene of Nibelungenlied and other Nibelungentradition.

研究分野：ドイツ文学

キーワード：ニーベルンゲンの歌 ニーベルンゲンの指環 ニーベルンゲン伝承

1. 研究開始当初の背景

(1) ニーベルンゲン伝承は、ゲルマン民族大移動期の歴史的事件に端を発し、地域や時代ごとに様々に語り継がれてきたものである。伝説は語り継がれていくうちに、その時代ごとの文化や人々の考え方に影響を受けたり、他の伝説群との接触によって新たな登場人物や筋を取り入れたりして変化してきた。1200～1205年頃に成立したとされる中高ドイツ語の叙事詩『ニーベルンゲンの歌』Das Nibelungenlied (以下『歌』)はその当時におけるニーベルンゲン伝承の集大成とも呼ぶべきものである。時代が下り19世紀には、ドイツの音楽家リヒャルト・ヴァーグナーがこの伝承を素材とし、四部作の楽劇『ニーベルンゲの指環』Der Ring des Nibelungen (以下『指環』)を作り上げた。今日一般に、「ニーベルンゲ」あるいは「ニーベルンゲン」という語を聞いた時に想起されるものは、おそらくこの二つの作品のどちらかであろう。作品の知名度の点でも、その後の伝承への影響の大きさの点からも、『歌』と『指環』はニーベルンゲン伝承における双璧であるといえる。

(2) この二作品に共通して登場する人物のうち、最もその設定や人物像が大きく変化したのはハーゲン・フォン・トロネエ(トロネゲのハゲネ)であろう。どちらの作品でも彼は竜殺しの英雄ジークフリート(ジーフリト)の殺害者であるが、『歌』では物語後半において、ジークフリートの未亡人クリームヒルトによる苛烈な復讐劇の中で悲劇的な英雄となるのに対し、『指環』では侏儒(ニーベルンゲ族)のアルベリヒが神々に奪われた指環を取り戻すために、人間の女性との間にもうけた息子であるという設定になっている。何故一人の人物がこのように違った描き方をされたのか、という疑問が、筆者がニーベルンゲン伝承を研究する発端であった。

(3) 研究開始以前に、筆者は、ハーゲンに相当する人物に焦点を当て、ニーベルンゲン伝承の発生から『歌』に至るまでの伝承の変遷を論じ、博士論文『『ニーベルンゲンの歌』における「英雄」ハゲネの造形』を完成させた。アンドレアス・ホイスラーの発展段階説をもとに、筆者は古い伝承の形を探る上で重要な北欧の文献『エッダ』、『ヴォルスンガサガ』、『シズレクスサガ』にあたり、各段階での物語の筋や人物の設定、描写の違いを検討した。また、ハーゲンの人物像の変化の手掛かりとして、ラテン詩『ワルターリウス』での描写も参照した。こうした古い伝承との比較により、『歌』で詩人がハーゲンを「英雄」として描こうとし、そのために新しい登場人物を創作し、人物配置の構成を注意深く行っているという、叙事詩独自の特色も明らかにした。本研究はその研究成果をもとに、さらに新しい時代の受容についてまとめ、特にヴァーグナーの『指環』とそれが後世の伝承に与えた影響を論じることを狙いとした。

2. 研究の目的

(1) ヴァーグナーが『指環』において素材をどのように用いて妖精の息子ハーゲンを造形したのかを検討する。

(2) 『指環』以後の伝承の変化について、網羅的にニーベルンゲン伝承を扱った作品を収集し、その傾向をまとめる。

3. 研究の方法

(1) 本研究は、広範囲な時代と地域に広がる伝承に関する人文学的な研究であり、その主要な方法は、

一次文献の収集

既存研究の文献的な検討

論文執筆・研究発表・成果の公開

等である。

(2) 平成27年度は主として、ヴァーグナーの『ニーベルンゲの指環』のテキスト及び舞台上演時の演出についての検討を行った。それに並行して、『指環』以後の新しいニーベルンゲン伝承を扱った作品の収集を行った。また、2016年3月には12日間、ドイツ国内のニーベルンゲン伝承ゆかりの地での、現在の伝承の受容の調査および文献収集を行った。

(3) 平成28年度は主として『指環』以後の一次文献の収集と整理、およびそこでの伝承の変遷について検討を行った。また引き続きヴァーグナーの『指環』についても二次文献の調査や、『指環』制作以前のヴァーグナーの草稿にあたるなどして、ヴァーグナーの思想とそれに基づく作品世界の検討を行った。

4. 研究成果

(1) ヴァーグナーの『指環』におけるハーゲン像については、以下の成果が得られた。ニーベルンゲン詩人は『歌』の後編において、ブルゴント王家(グンテル、ゲールノート、ギーゼルヘル)とトロネゲ軍(ハゲネ、フォルケール、ダンクワルト)の三対三の構造を設定した。楽人フォルケールは作中において、作者の代弁者であると同時に、トロネゲのハゲネの代理人であるという意味で、「二重の代理人」である。ニーベルンゲン詩人は、フォルケールの言動を通じてハゲネをこの叙事詩の中で英雄として歌い上げようという自らの意志を表し、また叙事詩前半の「獯猛な」ハゲネの像をフォルケールに引き取らせることで、後半の悲劇的展開の中でハゲネを異教的英雄として純化しようとしている。また、ハゲネの弟ダンクワルトは、ジーフリト暗殺について何の罪もない王家の末弟ギーゼルヘルとの相似性を持ったキャラクターとして、詩人自身によって創作された「潔白な若者」である。この若者がフン族の襲撃を受けたことを引き金に、ブルゴント族とフン族の戦闘が始まったことにより、聴衆の心理はブルゴント族が善、フン族が悪という図式に誘導される。こうしてダンクワルトがブル

ゴント側に戦いの大義を引き寄せ、フォルケールがハゲネを支持することによって、ハゲネはブルゴント滅亡という悲劇の中心に英雄として立つことを許される。

こうしてニーベルンゲン詩人によって形成された、ジークフリート暗殺者にして英雄でもあるハゲネは、後のニーベルンゲン伝説の受容におけるハーゲン像に決定的な影響を与えたと考えられるが、それはヴァーグナーの『指環』に対しても例外ではない。『指環』は『歌』からの直接の翻案ではなく、『エッダ』や『ヴォルスンガサガ』といった、ハーゲン（北欧ではヘグニ）がジークフリート殺害者ではない北欧の古い伝承から多くの要素を取り入れながら、なおもハーゲンをジークフリート殺害者でかつニーベルンゲ族の末裔としたのは、『歌』のハゲネ像によるところが大きいと言える。ヴァーグナーは独自の芸術理念に基づき、ニーベルンゲン伝承の様々なバリエーションから素材を取捨選択しながら、英雄ジークフリートを主人公にした創作を行った。そのジークフリートの敵対者として、『歌』においてジークフリートの敵対者でありかつ悲劇的英雄であったハーゲンには、『ニーベルンゲ（のアルベリヒ）の息子』という新しい設定が与えられたと考えられる。

また、ヴァーグナーは英雄ジークフリートの死をもって結末としたが、元来『エッダ』の「ニヴルンゲ族の殺戮」や、『シズレクスサガ』のニフルンゲン国という名称が示すように、ニフルンゲ＝ニーベルンゲはブルゴント族を指し、ニーベルンゲン伝承とはブルゴント族の滅亡までを語るものであったと考えられる。このヴァーグナーの『指環』型の新しい伝承においては、したがって「ニーベルンゲ」の意味も元来のものとは変化している。現代では一般的に、ニーベルンゲ族は小人族の別名であると解釈されているが、これはヴァーグナーの『指環』で規定され、20世紀のフリッツ・ラングの映画『ニーベルンゲン』Die Nibelungen などを経て定着したものである。こうして古い伝承ではブルゴント族（楽劇中のギービヒ一族、グンター）と同義であった「ニーベルンゲ」はブルゴントから引きはがされ、人間たちの中であってただ一人、アルベリヒが奪われたニーベルンゲの指環を手に入れるために人間の女性との間にもうけた息子、ハーゲンだけが、「ニーベルンゲの息子」を名乗ることになるのである。この設定は21世紀に入りウーリー・エデルのテレビ映画『ニーベルンゲの指環』The Ring of Nibelungs でも踏襲されており、ハーゲン像のバリエーションにおける一つの型になったといえるだろう。

以上の『歌』でのハーゲン像の特色については、2015年と2016年の口頭発表により成果報告を行った。

(2)『指環』以降のニーベルンゲン伝承の変化については、以下の成果が得られた。

現代のニーベルンゲン伝承の受容は、「過去の神々や英雄や貴婦人たちについての物語」として伝説そのものが語り継がれ変化してきた、かつての受容のあり方とは少々異なる様相をも含んでいる。現代の「ニーベルンゲン」は大きく以下のように分けられる：

- a. 既存の叙事詩や戯曲の再現（舞台上演、映像化、散文化、コミック化など）
- b. 伝承を素材とした新たな創作
- c. ネーミングやモチーフの断片的な利用
- d. 観光資源や展示物（例：ヴォルムスのニーベルンゲンムゼウム、2001年開館）

以下、それぞれの受容の型について、収集したテキストや映像ソフト、また調査旅行で得た材料を具体例として挙げる。

- a. 既存の叙事詩や戯曲の再現について

ここに分類されるのは、中世の叙事詩の現代語訳や子供向けにやさしく語りなおしたりするもの、またヴァーグナーであればテキストやスコアは変えず、演出だけを変えて繰り返し演じられるものである。『歌』の現代ドイツ語訳は、1827年初版のカール・ジムロックの古典的翻訳が、今日でも装丁を変えながら（Anaconda 2008, 2015）繰り返し出版されているほか、ヴァルター・ハンゼンがジムロック訳に、さまざまな図版を加えて編集した『ニーベルンゲンの歌 偉大なる英雄叙事詩』Das Nibelungenlied. Das große Heldenepos (Regionallia 2014)や、学術的なものではウルズラ・シュルツェにより編集されたテキストにジークフリート・グロッセが現代ドイツ語訳とコメンタールをつけたレクラムの新しいバージョンが新しく出版されている（Reclam 2010）。現代語の散文訳ではフランツ・フューマンの『ニーベルンゲンの歌』Das Nibelungenlied が、1971年に初めて発表されてから、異なる出版社から挿絵や装丁も様々に出版されているようである（Hinstoriff 1999, 2005 / Reihe Hanser 2006, 2015）。また若者向けに語りなおされたものとしては、グスタフ・シャルクの『ニーベルンゲン伝説』Die Nibelungensage (Anaconda 2009)（初出は『独逸の英雄伝説集』Deutsche Heldensage für Jugend und Volk, 1890/1891）、ヴィリ・フェールマンの『ジークフリート』Siegfried von Xanten (Thienemanns Verlag 1987 / Arena 2014)、『ドイツ英雄伝説』Deutsche Heldensagen (Arena 2013)などがある。なおシャルクのバージョンは日本語訳もあり、相良守峯訳『ニーベルンゲンの宝』（岩波少年文庫 1953）が現在も入手可能である。

ヴァーグナーの『指環』についてはこの研究の開始時点では、パイロイト音楽祭のブー

レーズ=シェロー（1980）とバレンボイム=クプファー（1991）の映像資料を所有していたが、新たにバレンシア・リング（2010）とスカラ座でのバレンボイムのバージョン（2010）のDVDを新たに入手し、現代でも『指環』の舞台は常に新しい演出によって生まれ変わり続けていることを再認識した次第である。

b. 伝承を素材とした新たな創作についてここに分類されるのは、既存の作品をもとに、あるいは再度エピソードを分解して整理しなおし、新たな作品へと再構築するものである。前述のウーリー・エデル監督のテレビ映画『ニーベルングの指環』（2004）はこの分類の代表的なものである。この作品においては『歌』と『指環』の要素が折衷されているが、物語中盤の見せ場として、『歌』の前半に挿入されたザクセン戦争が非常に大きな比重を占めていることが注目される。このザクセン戦争の重視は、おそらくより新しいニーベルンゲン伝承に影響を与えることになる、その兆しが既に見えている。天望良一によるコミック作品『亡国のジークフリート』（2012 - 2014）では、日本の少年マンガにおいてしばしば見られる、主人公が次々と強敵と戦う物語構成に、リウデゲールとリウデガスト、またその家来たちと、ジークフリートとブルグントの戦士たちとの戦いが当てはめられた。また、池田理代子原作・宮本えりか画のコミック作品『ニーベルンクの指輪』（2001 - 2002）もまた、『歌』と『指環』を折衷しつつ、権力をもたらず指輪を、現実世界から事故によって飛ばされてきたヒトラーが奪おうとするという、奇想天外な展開を見せる。

上記の三つの作品はいずれも『歌』の前半ないし『指環』で語られる範囲のみを扱っており、後半のブルグント族とファン族の戦いには触れられていないため、悲劇的英雄型のハーゲンは登場しないのだが、それぞれの作品におけるハーゲン像は全く異なっている。エデルのハーゲンは先に述べたように『指環』型のニーベルンゲン族アルベリヒの息子である。一方、天望のハーゲンはそうした超自然的な出自は持たず、グンター王の忠実な家臣であり剣技にすぐれた「若い」騎士として登場し、ジークフリートの強敵でありまた戦友ともいべき絆で結ばれたキャラクターである。特筆すべきは、この作品は、ザクセン戦争の後、ジークフリートがクリームヒルトに求愛を断られ、ヴォルムスを去って終わるので、ジークフリートは死なず、ハーゲンはジークフリート殺しの下手人という伝承から解放されている。また他方、池田・宮本のハーゲンは戦士というよりも役人ふうのグンター王の家臣となり、物語の駆動力となる強力な敵役の座をヒトラーに奪われている。このように、現代の新しいニーベルンゲン作品におけるハーゲン像は、『歌』『指環』の伝承に沿ったものもあれば、作品次第で思

わぬ変形を見せることもある。しかし、時代や場所によってハーゲンの設定や役割が大きく異なるのは、すでに古い伝承から『歌』の成立までの伝承の受容の中でも確認されていることである。「竜殺し」「暗殺される英雄」という一定の枠を保って描かれるジークフリート以上に、作者の意図によって形を変えられるハーゲンは、現代でもなお、作者の創作意図を探る際の重要な手掛かりとなるキャラクターであるといえるだろう。

c. ネーミングやモチーフの断片的な利用について

ここに分類されるのは、現代の特にアニメやゲームなどサブカルチャーの場面で顕著な特徴であるが、ニーベルンゲン伝承の登場人物や武器などの名前を作品中で利用するものの、物語の筋そのものは伝承に沿うものではない、という類のものである。例えば1988年のテレビアニメーション『聖闘士星矢』では、架空の北欧の国アスガルドを舞台とした「アスガルド編」または「黄金の指輪編」と呼ばれるエピソードにおいて、ジークフリート、ハーゲン、アルベリヒ、ミーメ、フォルケルといった、『歌』または『指環』に登場する人物と同名のキャラクターが登場した。しかし彼らは超自然的な出自などもたず、伝承のようにハーゲンがジークフリートを殺すといったような展開もなく、かと思えばフォルケルとミーメを義理の父子とするような、ある意味ででたらめともいえる名称のみの借用が見られた。また、キャラクターが剣を武器として戦うようなビデオゲームにおいて、『歌』でジークフリートが携えた剣の名称「バルムング」は、しばしば強力な武器の銘として用いられる。一例として2001年のゲーム『東京魔人学園外法帖』があるが、これは幕末の日本を舞台とした作品であり、当然ストーリーにはニーベルンゲン伝承は全く関わりがなく、純粋な名称のみの借用である（なおこの作品中には他にも古今東西の神話伝説に由来する名をもつ装備品が登場する）。

こうした断片的な利用においては、残念ながらハーゲンの名前はあまり確認されていない。多く利用されるのはジークフリートまたは北欧名のシングルズ、シグルドである。2015年に配信スタートしたスマートフォンアプリ『Fate/Grand Order』は、プレイヤーである「マスター」が、古今東西の神々や英雄、歴史上の人物などを「サーヴァント」として召喚して戦わせるロールプレイングゲームであるが、これには2017年5月現在、「ジークフリート」と「ブリュンヒルデ」というサーヴァントが実装されている（なお「ブリュンヒルデ」の台詞によるとこのゲーム内では「ジークフリート」と「シグルド」は別人扱いのようである）。第1章のストーリー中、竜の主人公の味方として登場したジークフリートは、竜殺しの英雄としての側面が強調

されていたが、暗殺された最期については物語中では触れられなかった。

d. 観光資源や展示物について

現在ドイツの各地に、ニーベルンゲンゆかりの地をうたう町や地域が存在している。ライン地方ではヴォルムス、ドナウ地方ではパッサウが「ニーベルンゲンの町」die Nibelungenstadt を名乗っており、ボン近郊にあるケーニヒスヴィンターのドラッヘンフェルス山はジークフリートが竜を退治した場所だとされ、ジークフリートはここで殺されたのだと主張している場所は3か所もあるという。2016年3月の調査旅行では、そうした地域のいくつかで伝承の受容を調査した。

『歌』の作者である匿名の詩人はドナウ地方出身であると推測されており、叙事詩前半の舞台となるライン地方については詳細な知識を持たぬまま創作したために、作中に登場する地名やその位置関係に混乱のある箇所が見受けられる。よく取り沙汰されるのは、ブルグント族が狩に出かけた森の名前についてである。作中では「ヴァスケンの森」とされているが、正しくは「オーデンの森」であろうと推定されている。さらにその森の中の泉でジークフリートが暗殺されることになるのだが、その泉が具体的にどこかといったことについては、何箇所かの候補が挙げられているものの特定には至っていない。そのうちの一つ、グラーゼレンバッハの「ジークフリートの泉」では、森の入り口から件の泉までの歩道が整備され、途中の数箇所に『歌』の粗筋が書かれた看板が立てられており、道をたどりながら『歌』の物語を追体験するような、観光向けの趣向が凝らされているのだが、その入り口の看板には「Historischer Siegfriedbrunnen (歴史上のジークフリートの泉)」と書かれていた。このように中世のある詩人による創作が、あたかも歴史上の事実であるかのように扱われている場面が、ヴォルムスとその周辺地域ではしばしば目撃された。「ニーベルンゲンラント」Das Nibelungenland と呼ばれるこの地域においてはまた、2000年代に入ってから『歌』の成立800年を記念して、「ニーベルンゲン=ジークフリート街道」沿いの各地に、『歌』の場面を表現したオブジェが設置されたり、毎年ヴォルムスの大聖堂のそばに野外劇場が設置され、演劇祭「ニーベルンゲン・フェスト シュピーレ・ヴォルムス」NibelungenFestspiele Worms が開催されるなど、様々な新しい形のニーベルンゲン伝承の受容が行われていることが、取材と現地での収集した資料により分かってきた。

これらの一種の地域おこしの伝承の受容の中において、ハーゲンはジークフリートの殺害者であるという役割はそのままに、その殺害の場面を表した彫刻が置かれたり、ニーベルンゲン財宝を川に沈める姿の銅像

(Hagendenkmal) が立っていたり、そのそばにはハーゲンの名を冠した地ビールの醸造所兼レストランがあったり、またHagendenkmal を描いた皿が土産用に売られていたり、単なる悪役・嫌われ者ではない、独特の受容の形を見せている。また、『歌』のフォルケールの出身地とされるアルツァイにおいては、実在した人物ではないフォルケールが郷土の英雄のごとく扱われており、それにともないハゲネはフォルケールが支持した叙事詩後半の悲劇的英雄としての姿でもって受容されているようである。街中の噴水には夜警にあたるフォルケールとハゲネのレリーフが施されていた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計2件)

野内清香、『歌』から『指環』へのハーゲン像の変化、日本独文学会 2016 年秋季研究発表会、

2016 年 10 月 22 日、関西大学千里山キャンパス(大阪)

野内清香、「二重の代理人」フォルケール『ニーベルンゲンの歌』の詩人が楽人に仮託した役割、日本独文学会 2015 年秋季研究発表会、

2015 年 10 月 13 日、鹿児島大学(鹿児島)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

野内 清香 (NOUCHI, Sayaka)

東北大学・大学院文学研究科・助教

研究者番号：70757913

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

なし